

# 図書館だより

No.11

令和7年3月  
大洲中学校図書館

3月を迎える。3月は卒業式がありますね。3年生の皆さん、3年間お疲れ様でした。今はまだピン！と来ないでしようが、時が経つにつれ、大洲中学校の良さが分かってくると思います。大洲中の先生たちのたくさんの愛情に包まれて育った3年間のことを、決して忘れないで下さいね。そして、3年生の後を引き継ぐ1、2年生の皆さん、4月に入学して来る新1年生の良き先輩として頑張ってくださいね。You can do it！



## 本屋大賞 2025 バイネート作品決定！

今回で22回目となる本屋大賞。本屋大賞とは、本好きの書店員さんたちの投票によって選ばれる「この一年間で最も面白かった、お客様にお勧めしたい、自分のお店で売りたい本」のNo.1を決めるものです。その道のプロによって選ばれる本なので、もちろんハズレはございません。現在は、一次選考を通過した10作品の選考が行われている最中です。大賞の発表は4月9日です。では、その10作品についてご説明いたします。

※記載順並びに照会文は本屋大賞実行委員会、他のものを参照

### ・「アルプス席の母」 早見 和真/小学館



高校球児を支える母親を描く感動作。デビュー作『ひやくはち』以来となる著者渾身の、まったく新しい高校野球小説。息子とともに母親の菜々子は息子が進学した高校のある大阪に拠点を移すことを決意する。不慣れな土地での暮らし、厳しい父母会の掟、激瘦せしていく息子。果たしてふたりの夢は叶うのか?! 母親たちの熱闘甲子園！

### ・「カフネ」 阿部 晓子/講談社



法務局に勤める野宮薰子は、溺愛していた弟が急死して悲嘆にくれていた。弟が遺した遺言書から弟の元恋人・小野寺せつなに会い、やがて彼女が勤める家事代行サービス会社「カフネ」の活動を手伝うことに。弟を亡くした薰子と弟の元恋人せつな。食べることを通じて、二人の距離は次第に縮まっていく。

### ・「禁忌の子」 山口 未桜/東京創元社



救急医・武田の元に搬送されてきた一体の溺死体。その身元不明の遺体はなんと武田と瓜二つであった。彼はなぜ死んだのか、そして自身との関係は何なのか、武田は旧友で医師の城崎と共に調査を始める。しかし鍵を握る人物に会おうとした矢先、相手が密室内で死体となって発見されてしまう。自らのルーツを辿った先にある、思いもよらぬ真相とは…。過去と現在が交錯する、医療×本格ミステリ！ 第34回鮎川哲也賞受賞作。

### ・「恋とか愛とかやさしさなら」 一穂 ミチ/小学館



カメラマンの新夏は啓久と交際5年。東京駅の前でプロポーズしてくれた翌日、啓久が通勤中に女子高生を盗撮したことであたりの関係は一変する。「二度としない」と誓う啓久とやり直せるか葛藤する新夏。信じるとは、許すとは、愛するとは。男と女の欲望のブラックボックスに迫る著者新境地となる恋愛小説。

・「小説」野崎 まど/講談社



12歳の少年内海集司は、小説の魅力を共有できる生涯の友・外崎真と出会い、二人は小説家が住んでいるというモジヤ屋敷に潜り込む。そこでは好きなだけ本を読んでいても怒られることはなく、小説家・髭先生は二人の小説世界をさらに豊かにしていく。しかし、その屋敷にはある秘密があった。それでも小説を読む。小説を読む。読む。宇宙のすべてが小説に集まる。

・「死んだ山田と教室」金子 玲介/講談社 \*当館蔵書あり



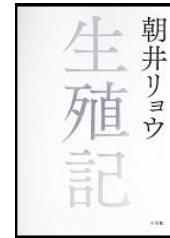
夏休みが終わる直前に人気者の山田が死んだ。悲しみに沈むクラスに担任の花浦が席替えを提案すると教室のスピーカーから死んだ山田の声が聞こえた。山田はスピーカーに憑依してしまったらしい。“俺、2年E組が大好きなんで”。声だけになった山田と、二Eの仲間たちの不思議な日々がはじまる。

・「spring」恩田 陸/筑摩書房



自らの名に無数の季節を抱く無二の舞踊家にして振付家の萬春(よろず・はる)。少年は8歳でバレエに出い15歳で海を渡った。同時代に巡り合う、踊る者、作る者、見る者、奏でる者。それぞれの情熱がぶつかり合い、交錯する中で彼の肖像が浮かび上がっていく。彼は求める。舞台の神を。憎しみと錯覚するほどに。一人の天才をめぐる傑作長編小説。

・「生殖記」朝井 リョウ/小学館



主人公・尚成(なおなり)が、同僚と共に新宿の家電量販店を訪れるところから物語が始まる。物語の設定自体は日常的だが、その背景には「寿命を効率よく消費する」という奇妙な目的があり、ここから物語は予想外の方向へと展開していく。この本は、現代社会におけるマイナリティの生きづらさや、多様性を認める社会の中で感じる違和感をテーマにしています。読み進めるうちに読者自身もその問いを考えさせられるでしょう。作品のテーマに読者は強い印象を残すこと間違いありません。

・「成瀬は信じた道を行く」宮島 未菜/新潮社 \*当館蔵書あり



まさかの2年連続本屋大賞ノミネート！ちなみに一作目の「成瀬は天下を…」は2024年度の大賞に輝いているので、もし今回も大賞受賞となれば本屋大賞初の2年連続大賞受賞となる。(二回受賞者は二名あり)成瀬の人生は今日も誰かと交差する。娘の受験を見守る父、近所のクレーマー(をやめたい)主婦、観光大使になるべくして生まれた女子大生…。個性豊かな面々が新たに成瀬あかり史に名を刻む中、幼馴染の島崎が故郷へ帰ると成瀬が書置きを残して失踪…!? 読み応えますパワーアップの全5篇！

・「人魚が逃げた」青山 美智子/PHP研究所 \*当館蔵書あり



ある3月の週末、SNS上で「人魚が逃げた」という言葉がトレンド入りした。どうやら「王子」と名乗る謎の青年が銀座の街をさまよい歩き、「僕の人魚が、いなくなってしまって…逃げたんだ。この場所に」と語っているらしい。彼の不可解な言動に、人々はだんだん興味を持ち始め…。そしてその「人魚騒動」の裏では、5人の男女が「人生の節目」を迎えていた。銀座を訪れた五人を待ち受ける意外な運命とは。「王子」は人魚と再会できるのか。そもそも人魚はいるのか、いないのか…。

さてさて、2025年度の本屋大賞は果たしてどの作品に決まるでしょうか。あと1ヶ月少々で結果発表です。もちろん大賞受賞作品は購入しますので楽しみにしてくださいね。